

① 次の文章は『源氏物語』の一節で、「人」が「君」を話し相手にして、故「中宮」のことが語られている。これを読み、後の問(問1～問7)に答えなさい。

雪のいたう降り積もりたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に、人の御容貌も光りまさりて見ゆ。「時々につけても、人の心をうつすめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの身にしてみても、この世の外のことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。すまじき例に言ひおきけむ人の心淺きよ」とて、御簾捲き上げさせたまふ。月は隈なくさし出でて、ひとづ色に見え渡されたるに、しをれたる前裁のかげ心苦しう、遣水もいといたうむせびて、池の氷もえもいはすすまじきに、童へおろして雪まるばしせさせたまふ。をかしげなる姿、頭つきども月に映えて、大きやかに馴れたるが、さまさまの相乱れ着、帯しどけなき宿直姿なまめいたるに、「こよなうあまれる髪末、白きにはましてもはやしたるいと」Aなり。小さきは、童けてよろこび走るに扇なども落として、うちどけ顔をかしげなり。いと多うまるばさむとふくつけがれど、えも押し動かさずわぶめり。かたへは東のつまなどに出でて、心もとなげに笑ふ。

「ひと年、中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたることなれど、なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしかな。何のをりをりにつけても、口惜しう飽かずもあるかな。いとけ遠くもてなしたまひて、くはしき御ありさまを見ならしたてまつりしことはなかりしかど、御まじらひのほどに、うしろやすきものには思したりきかし。うち頼みきこえて、とあることかがるをりにつけて、何ごとも聞こえ通ひした、もて出でてらうらうじきことも見えたまはざりしかど、言ふかひあり、思ふさまに、はかなき事わざをもしなしたまひしはや。世にまたさばかりのたぐひありなむや。やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたるところの並びなくものしたまひしを、君こそは、さいへど紫のゆゑこよなからずものしたまふれど、すこしわづらはしき氣添ひて、かどかどしさのすすみたまへるや苦しからむ」とのたまふ。

『源氏物語』による

※注 人——源氏。 相——童女が着る衣服。

中宮——故藤盞の中宮。源氏の父桐盞帝の后。

君——紫の上。源氏の妻。

紫のゆゑ——

「君」が「中宮」の姪であることという。

問1 空欄Aを埋めるのに、最も適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア しりがほ

イ あやにく

ウ いとほしげ

エ けさやか

オ ひややか

問2 傍線部①「あやしう色なきものの身にしてみても」とはどのようなことをいっているか、説明しなさい。

問3 傍線部②「いと多うまるばさむとふくつけがれど」を現代語に訳しなさい。

問4 傍線部③「うしろやすき」の意味として、最も適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア もつたいない

イ 気の置けない

ウ はがゆい

エ 見た目がいい

オ 放っておけない

問5 傍線部④「深うよしづきたるところの並びなくものしたまひしを」を現代語に訳しなさい。

問6 傍線部⑤「御簾」、⑥「前裁」、⑦「遣水」について、それぞれ読みがなを記しなさい。

問7 傍線部⑧「まして」、⑨「口惜しう」、⑩「やはらかに」について、それぞれ品詞名を記しなさい。

② 次の①～③の作品について、それぞれ五十字程度で説明しなさい。

①蜻蛉日記

②徒然草

③日本永代蔵

日本文学科	解答用紙	受験番号	
			氏名

1

問 7	問 6	問 5	問 4	問 3	問 2	問 1
㉑	㉒					
㉓	㉔					
㉕	㉖					

2

③	②	①